

校註 北越雪譜

監修 宮 栄 二  
校註 井 庆 隆  
高 上 橋 実

野島出版

校註 北越雪譜

監修 宮 栄二  
校註 井 上 慶 隆  
高 橋 実

野島出版

**校註北越雪譜**

¥ 580

昭和45年6月5日 初版発行

昭和46年4月10日 四版発行

監修者 宮 栄 二

校註者 井 上 慶 隆

高 橋 実

発行者 株式会社 野島出版

(代表者) 馬場由太郎

印刷所 信教印刷株式会社

**発行所 株式会社 野島出版**

新潟県三条市一ノ木戸1947

TEL (02563)(3)0521(代表)

## 凡例

一、本書の底本には、それぞれ奥付に、初編「天保七年丙申九月」・二編「天保十三年壬寅孟春」と記す版本を用いた。

ただし天保奥付版本でも、初編は天保七年の奥付をそのままに、後刷において二十箇所ほど  
の語句の訂正がみられる。また二編は、奥付の天保十三年をそのままに「同志発行書林、河内  
屋喜兵衛・河内屋茂兵衛・丁字屋平兵衛」のうち「河内屋喜兵衛」が後刷では「堺屋新兵衛」  
と改刻され、さらにここが空白となる。この間、本文が一箇所改刻、また後刷になるほど挿絵  
の手抜きがはなはだしくなる。

本書では、これら初刷・後刷の諸本を比較検討の上、本文は訂正された後刷を採り（初編下  
之巻「鮓の始終」の段の「男魚」の振り仮名のみ初刷によつたが、その理由は該部分の脚註に  
記す）、挿絵は手抜きのない初刷によることにした。そして初刷・後刷の相違する箇所につい  
ては、それぞれ脚註または補註でその旨を指摘、一部は典拠をあげて改刻の理由を説明した。

一、本文の校訂にあたっては、版本の面影を忠実に伝えようとつとめ、振り仮名・送り仮名・仮

名遣い、および△〇「などの符号も可能なかぎり版本のままとしたが、また一般読者の便を考慮して次のような操作を行なつた。

1、適宜に句読点をつけた。

2、仮名の字体は現行の字体に統一した。

3、濁点の有無について、多少とも意識的と思われるものはそのままにしたが、明らかな誤脱はこれを補正した。

4、漢字とその振り仮名については、「郡る」あつる」「固に」かなみ」「功に」こうみ」「私伐」しづかなどのごとき明白な誤謬箇所はそれぞれ「群る」あらま」「因に」ちなん」「巧に」たたく」「私伐」と正したが、固有名詞は全て版本のまとどし、誤りあるものは註で訂正した。

5、漢字は、版本の字体そのものが当用漢字の字体と合致している場合が多いが（たとえば、円・尽・体・為・称など）、また各種字体の混用も少なくない。異体字・俗字など正字に直し、新旧字体の相違するものは、おおむね現行当用の字体に改変統一した。たとえば「窓」「窗」「窓」「囱」は「窓」に、「靈」「靈」「灵」は「靈」に、「國」「國」「国」は「國」にまとめた。

その他おもな改変を例示すれば左のごとくである。

皈・歸→帰

阴→陰

貞→貌

阳→陽

體→体

后→後

圓→円

艸→草

哥→歌

从→従

6、割註の振り仮名は、該当する漢字の下に括弧して記入した。

一、挿絵は全てを収め、版本の位置に近い箇所に適宜挿入したが、廣告・奥付などは省略した。

一、脚註は見開きごとに番号を付し、その順に註解した。

地名は現在の行政区画によるものを示したが、新潟県内の地名は「新潟県」を略し、南魚沼

郡塩沢町については「南魚沼郡」を略した。

脚註のスペースにおさまらぬもの、また特に考証を要するものは補註に回した。

一、目次は、版本では各巻の巻頭にあるが、本書では、便宜上これらをまとめて最初に置いた。

本文中の題と目次の題と相違する所があるが、これは各巻の巻頭のものに従つたためである。

たとえば初編巻之上の「熊捕」「白熊」が目次では「熊捕並白熊」となつており、また巻之下「総滝」が「千曲川の総滝」となつてている、などである。

## 北越雪譜初編上之卷

目

次

地氣雪と成る弁	七
雪の形状	八
雪の深浅	八
雪意	三
雪の用意	三
初雪	三
雪の堆量	五
雪竿	五
雪を払ふ	七
雪沫	七

雪道	二七
雪蠶	二〇
胎内潜	二一
雪中の洪水	二二
熊捕並白熊	二三
熊人を助	二七
雪中の虫	二九
雪吹	三一
雪中の火	四四
破目山	四六

北越雪譜初編中之卷

雪なたれ  
頬

なだれ  
雪頬人に災す  
わざはひ

寺の雪頬なづれ

玉山翁が雪の図  
五九

越後縮  
えちごくわく

## 縮の種類

縮の紹並紹績

縷縵はたおりをんな

織婦　はたおりをんな　きちがひ

おはたや 織婦の発狂

御機屋  
れいゐ

御機屋の靈威

北越雪譜初編下之卷

縮を曬す並縮の市.....七二

ほあら.....  
まつりあらはながわく、ま

雪中花水祝ひ

菱山の奇事

秋山の古風

卷之三

# 狐を捕る

雁の代見立  
あみ

# 天の網

## 雁の絆立

渋川さい涉り

總 目 錄

3

北越雪譜二編一之卷

越後の城下  
古歌ある旧蹟

一五  
一五

渤海川さかべつたう	しぶみかは	一〇
鮭の字考	さけのかなべ	一一
鮭の食用	さけのじゆう	一二
鮭を出す所並鮭始終	さけのひだりそよなべり	一二
鮭を捕る打切並つゞ	さけをとくちぎりそよなべり	一二
搔網	かきあみ	一二
漁夫の溺死	ぎょふののきし	一二
千曲川の総滝	せんくわいのそうたき	一二
鮭漁の類術	さけぎょのるいじゆ	一二
鮭の洲走り	さけのすばし	一二
人家の垂冰	じんかのたるひ	一二

笈掛け岩の氷柱	あひかけいはつらう	一三
滝の氷柱	たきつらう	一四
雪中の寒行	せつちゆうかんぎょう	一五
寒行の威徳	かんぎやうゐとく	一六
雪中の幽靈	せゆうのゆうれい	一七
関山村の毛塚	せきやまむらのけづか	一八
泊り山の大猫	おはねこのおほねこ	一九
山言語	やまごとば	一九
童の雪遊び	わらべゆきあそび	一九
雪に座頭を降す	さとうをさがす	一九

## 北越雪譜

玉栗・羽子擢	たまぐり はごつき	一四
雪吹に焼飯を売	ふきにやきめしをうる	一五
雪中の戯場	しづかる	一六
家の氷柱	ひづら	一七
雪中の用具	せつちゆうようぐ	一八
幘の説	ひのせつ	一九
雪頬に熊を得る	くまほほにくまをうる	二〇
雪顔の難	なん	二一
雪中の葬式	さつらうしき	二二
龍燈	りゆうとう	二三
芭蕉翁が遺墨	はせうわぐわ	二四
芭蕉略伝	はせうりやくでん	二五
はせをの容貌	かはかたぢ	二六

## 北越雪譜二編二之卷

化石溪	くわせきだに	一四
亀の化石	くわせき	一五
夜光の玉	よけいのたま	一六
餅花	もちばな	一七
斎の神勧進	さいのかみくわだん	一八
斎の神祭事	さいのかみさいじ	一九
天麩羅の始原	てんぶらのはじまつ	二〇

練羊羹の起立

雪中の狼

北越雪譜二編三之卷

三三

鳥追櫓

三四

雪 霜

三五

地獄谷の火

三六

越後の人物

三七

無縫塔

三八

北越雪譜二編四之卷

三九

異獸

三一〇

火浣布

三一

弘智法印

三二

土中の舟

三三

白鳥

三四

両頭の蛇

三五

浮島

三六

美び人	石打明神	二八三
蛾眉山下標準	二八四	二八五
苗場山	二八六	二八七
三四月の雪	二八八	二八九
鶴恩に報ゆ	二九〇	二九一

練羊羹の起立

雪中の狼

北高和尚

三三

年賀の歌

三四

逃入村の不思議

三四

菅神御伝略

三五

田代の七つ釜

三六

北高和尚

三七

北高和尚

三八

北高和尚

三九

北高和尚

三一〇

北高和尚

三一

北高和尚

三二

北高和尚

三三

北高和尚

三四

北高和尚

三五

浮島

三六

両頭の蛇

三七

白鳥

三八

土中の舟

三九

弘智法印

三一〇

雪 霜

三一

地獄谷の火

三二

越後の人物

三三

無縫塔

三四

北越雪譜二編四之卷

三五

異獸

三六

火浣布

三七

弘智法印

三八

土中の舟

三九

白鳥

三一〇

地獄谷の火

三一

越後の人物

三二

無縫塔

三三

地獄谷の火

三四

越後の人物

三五

無縫塔

三六

地獄谷の火

三七

地獄谷の火

三八

地獄谷の火

三九

地獄谷の火

三一〇

索	解	補
引	説	註
あとがき	略年譜	三〇三
三九	三七	三五

## 北越雪譜叙

世之農商而嗜文雅者、或不知所以文雅為文雅、徒企羨韻土墨客之風標、沈酣文酒、流連花月、而置生計於不問、以傾產業者、間亦有之、是豈嗜文雅罪哉、其人特自取之耳矣、鈴木牧之翁者北越塙沢之老農也、性嗜文雅、而能尚節儉、抑驕惰、不絕誦、讀於經營之中、而務鉛槧於會計之余、以交遠近之墨客、嘗以堪忍二字銘自守、以故其名久布遠邑、而生業亦因以致豐饒矣、嗚呼若翁者不徇文雅之名、而能務其實者、非耶、余於翁得一面識於江戶、而後特以書訂交者有年于此、今茲乙未、遠寄示其所著北越雪譜者六卷、併嘱以校訂、時方盛夏炎威如爍、乃就北窓下一試繙而閱之、則越雪恍如耳聞騷屑之声、目見粉霏之影、使人頓忘艱中之苦、讀到積暋埋屋行旅不通人以窮乏柴米或不給、則凜然寒顫肌膚為之粟生矣、余因以謂、紈袴輕薄子弟、當微雪俄下、紛々舞空之際、彫鞍寶勒飛玉塵於郊壠、或氈帽棕鞋蹈瓊瑤於街衢、或画舸載妓、或高樓呼酒、直以為勝遊樂事、曾不知飢寒為何物、若令其一人、讀此書、依以想其種々凍餒之苦狀乎、然則安知不有能省悟、非宴安之公共、而戚々焉生戒懼之心者哉、寧梓而行之其有裨益世教、蓋非鮮小也、間者稍得秋

涼、聊削其駁雜、校訂方畢者三卷、書賈文溪堂見而喜之謀梓一行之、余寄簡以告翁、々曰  
 雪中閉戶漫筆、豈敢欲梓耶、於是乎、不復俟々請之於翁、一舉以付之、翁之嗜文雅、而能務其  
 実、此必笑領之而已、翁之稿本国字之間漢字者、嘗不添音訓之假名、余今尽添之以便童蒙、  
 云爾天保六年乙未秋園菊開日

江戸

京山人百樹并書



此書の稿本、図ハ別冊とし、或は其説に大図を描して添たるもあり。皆牧之翁が自筆の草画也。此挙梓行の為にせざれば図に洪纖重複あり。今梓に臨て其図の過半を省き目を新にするものを存して巻中に夾刺するは単冊に尽し難を以て也。斯は是刪定の意に係る所也。余嘗て原図を閲するに、雪中の諸状混錯を走墨に失して通曉し難きもの靴中の瘡痒これを何如せん。唯翁が草図に微ひて真に描せる而已。或原図の梓に入るものは則これを加ふ。或は説有て図無きもの其説に拠て其図を作りしもあり。蓋余未だ越地を踏ず、越雪の真景に於て茫然たり。故に雪図に於て違漏あるも知るべからず、其誤を編者に駆ること勿れ。

乙未秋 京山男少年  
京水百鶴





